



昭和の町商店街。



大分県豊後高田市

シリーズ  
探訪・探究

# 訪れたいまち

## 第17回 大分県豊後高田市

豊後高田市は、負の遺産とも思われたシャッター街を「昭和の町」として再生させ、奇跡ともいえる復活をとげた。賑やかな商店街。誰もが懐かしい思い出を見つけ、幼い子どもに還っていた——。

### キーワードは『思い出探し』

「わあ、懐かしい！こんなやったなあ」「私もこんなもってたわー」  
熟年女性グループの声は弾んでいる。「前にどこかで見たことがあるよねえ」

団塊世代の男性はもちろん、なぜか昭和には生まれていないだろう若いカップルから子どもを連れた家族まで、そう話しながら町歩きを楽しんでいる。

ここは国東半島の北西部に位置する豊後高田市。「お帰りなさい、思い出の町へ」をキャッチフレーズに年間四十万人の観光客が訪れる町である。

昭和30年代、町は「おまち」と呼ばれ、県北一の華やかで活気あふれる商店街があった。日本が高度成長期に沸いていた昭和40年、宇佐参宮鉄道廃線を機に急激にゴーストタウン化。その後約36年間、町は凍り付いたように時代の波から取り残されていく。

町づくりを始めた平成13年頃、中心市街地の四割は空き店舗、休日でも人がいない。犬猫商店街と揶揄され、人々の心も元気を失っていた。

「どげーしたらシャッターを開けてもらえるじゃろか……」このままでは高田は人が住めない町になってしまう。町の個性、高田らしさとは何だろう？と考えた時、「昭和の町」というテーマが生まれた。不安や反対意見

もあつたが、商工会議所職員の金谷俊樹さんは、商店主を一人ひとり説得して歩いた。

当初七店だった「昭和の店」は、現在三十八店。商工会議所が認定を行い、共通の看板を掲げている。昭和の店のみを観光マップに掲載して積極的なPRを行い、案内人がお客様の希望や時間にあわせて店の歴史を案内している。

### 商業と観光の一体化

町の特徴は、商店街そのものが観光地になっていることだ。約550メートルの商店街に衣食住の生活必需品から昆虫を売る店まで、多様な個人商店が軒を連ねる。

町並みは、昭和の雰囲気を出し、懐かしさや癒しを感じられるように統一した。アルミサッシは木製のサッシに。看板は、ブリキや木製の一枚看板に戻し、昭和らしくない構造物は撤去した。

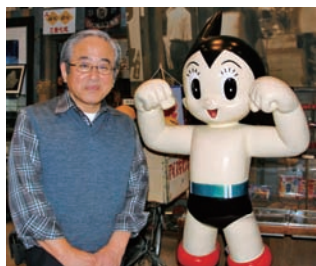


ウエガキ薬局(看板の文字は右から左！)。



**駄菓子屋の夢博物館 館長・小宮裕宣さん**

「人の記憶は、パソコンのように消去されていくものではなく圧縮され保存されているものだと思います。懐かしい玩具は、一瞬で、遊んでいた場所、天気、その日のお母さんの言葉、匂いや味—どうしてこんなことを思い出したんだろう?と思うくらい昔の記憶を引っ張り出してきます。かけがえのないあなただけの思い出を探してください。町の方の熱い想いにひきずられ福岡から単身赴任しています。今は玩具を並べたいという夢を叶える機会をいただいたと思っています」



**肉のかなか店主 金岡次男さん**

「11年前、昭和の町の構想を金谷さんから聞いているうちに、子どもの頃の賑やかだった商店街や盛大なお祭りを思い出しました。「懐かしい昔の商店街に戻そうよ」という夢に乗ったんです。わくわくして夜遅くまでみんなで話し合いました」



おかみ相伝のおからコロッケ。



店の宝は初代手回しの肉切り機。

**これなが手芸 是永香代子さん**

「夫が倒れ一度は閉店した店を再開しました。寝たきりだった夫今はよくなり、洋服のお直しや、手芸教室を開いています。人に会えること、日々進化し、自分もお客様も進歩していくことが本当に楽しいです」



店の宝は今も現役の足踏みミシン。

**森川豊国堂店主 森川克己さん**

「私は、ここで生まれ、ここで育ちました。商店街は地元の顔ですから、次の世代、次の次の世代まで引き継いでいって欲しい。人口が減り、高齢化が進む町の中でも商店街が元気になるためにお客様との対話を大事にしています」



アイスクャンデー。行商時代から変わらない味。



**駄菓子屋の夢博物館**

子どもの頃の思い出を大事にする心に打たれ町が誘致。約30万点を超える收藏品から6万点を展示。

**杵や 清末素子さん**

「子どもは田舎の自然の中で育てたい、という夫と共に東京からUターンしました。先代は卸のみ行っていたので、空き店舗対策事業第一号店として昭和の町と同時に商店街に開店しました。保存料などを一切使わず地元の材料にこだわっています」



**昭和の夢町三丁目館**

民家や駄菓子屋、教室を再現。昭和の暮らしを体感できる。

ピーナツ餅、石垣餅、そばせんべ。

**昭和ロマン蔵外観**

蔵の前にはダイハツミゼットなど昭和の車が並ぶ。大人も子どもも伍ぼっくりや竹馬に興じる。



昭和の町をご案内します!



**昭和の町案内人 河野峯子さん**

元バスガイドで町を知り尽くした案内人さんが町と人とお店をつなぐ。通る声、明るく軽妙なガイドでお客様を楽しませている。

費用の三分の二を行政が補助し、三分の一は、個人負担とした。商店街の80%が昭和から手つかずで残っていたことが逆に幸いして費用を抑えることもできた。

昭和の店には、店に伝わる昭和のお宝「二店一宝(非売品)」が展示されている。手芸屋の宝は、足踏みミシン、電気屋の宝は、昭和30年代の三種の神器(テレビ・洗濯機・冷蔵庫)。当時は、この三つが揃うと裕福な家庭と言われていたそう。

それらをガラス越しに眺め、店先にある説明を読んでいると、「どこからこられたんですか?ちよつと寄ってお茶でも飲んでよこうていきよ! (お茶でも飲んで休んでいってください!)」と声がかかる。そうだ、あの頃の商人は、こんなふうにお客様と会話をしながら商いをしていたのだ。

商品の一つとして昔から伝わる自慢の「二店一品」が販売されている。金物屋自慢の品は、亀の子たわし、薬屋自慢の品は、初代つおさんが調合した漢方の風邪薬「テツオニン」。肉屋の前を通った観光客は二様にコロッケを一つ手にして歩いていった。

**「懐かしい商店街を残したい」**

町の主役は商店主。商工会議所は商店街のコーディネートを行い、行政がインフラ整備や人的支援を行ってきた。



# 昭和の町マップ



田染荘。国の重要文化的景観に選定されている。



国宝富貴寺大堂。

昭和の町(観光)は生活に密着した定住者向けの商店街(商業)があつて成りたつている。だが、その両立には難しい課題もあつた。

観光は、地域の魅力を他所の人に売り、商業は他所の物を仕入れて地域の人に売る正反対の業種である。また、商店街を維持するためには町の人口を維持することも必須となる。

観光によるマイナスはなかつたが、必ずしも各商店平等に経済的な効果をもたらされるわけではない。飲食店なら、お客様が増え収益も上がるが、呉服屋や電気屋には観光地化による利益はなかつた。

さらに商業は個人戦だが、観光は地域全体に及ぶ団体戦が必要になってくる。

そこで平成17年、全国に先駆けて観光まちづくり株式会社を設立し、米蔵を改築して昭和ロマン蔵と名付けた駄菓子屋の夢博物館や、昭和の絵本美術館などを整備。収益を確立させて町全体のマネジメントを行っている。代表取締役の野田洋二さんは、商工会議所の会頭でもあり民間と行政との連携が取りやすい。

「店が全て土産物屋になってしまったら商店街としては機能しません。昭和の町はまたシャッター街に戻ってしまいます。さまざまな問題は、懐かしい商店街を残したい」という市民共通の願いが解決してきました。

郊外型の大型量販店などもありますが、町には電気屋が五店、薬屋も二店あります。多少高くともきめ細かなサービスが得られるこのお店で買いたいというお得意様がいて大型店との住み分けもできています。

昭和の町は、まさに人の力でできた町です」

## 昭和の町から千年の旅へ

この町の魅力は、風景を昭和三十年代に統一させただけではない。「家族が集い、隣近所が肩を寄せ合つて暮らしていた生活」も再生し、暮らしとともにあつた「お祭りや行事などの歴史や文化」が人々に引き継がれていることにある。

国東半島は古代、六郷満山と呼ばれる山岳仏教文化が花開いた土地であり、国宝富貴寺などの寺社や熊野磨崖仏をはじめとした多くの遺跡がある。中世、宇佐八幡宮の最も重要な荘園として栄えた田染荘は緑豊かな荘園村落が広がり自然の眺めも美しい所である。

観光まちづくり会社では将来の広域観光へのステップとして近隣地域と連携を進めている。

一歩ずつ着実に階段を上り夢を形にしてきた豊後高田市は、昭和から古代まで千年の時間旅行を体感できる出発地としてさらに発展し続けている。

### ●中心市街地の活性化事業とは

国土交通省では、少子高齢化が進む社会で都市機能の拡散防止と、中心市街地の活性化を図っています。さまざまな公共交通や都市機能、生活拠点がコンパクトに集積したまちづくりを支援する事業を行っています。



熊野磨崖仏。国の重要文化財。

### 食 べ る

豊後高田市は九州一のそば粉の産地。観光まちづくり会社は、農業とも連携を図り、そば職人の養成を行っている。豊後高田産のそば粉を使い、ひきたて、打ちたて、茹でたての美味しいそばを提供する店を「豊後高田そば認定店」としている。



古民家を改築した一軒家。

しゃも南十割そば(温麺は二八)。



### そば処響店主 石丸誠さん

「サラリーマンで全国を転勤していましたが、最後は自分で辞令を出しました。今は、毎朝四時半からそばを打ち、蕎麦粉と向き合う日々です。高田の人々、友人、家族、多くの巡り違いとバックアップに感謝しています」



## MLITレポート

全国各地で働く国土交通省職員が地元を紹介します。

Reporter

九州地方整備局  
大分河川国道事務所  
道路管理指導官  
田崎 雅信



**み**なさんは、「道守<sup>みちもり</sup>」という言葉をご存知ですか？ 道守は、古くは万葉集にも詠われており、旅人の飢えや渴きを癒そうと道沿いに果樹などを植えた心に由来するといわれています。

“道守の心”を21世紀に継承し、発展させようと立ち上げたのが「道守九州会議」です。現代の道守は「道」を舞台に、行政との協働でボランティアを基本に個人、市民団体、企業が、地域を学び、道路愛護の心を育み、情報発信を行っています。

平成16年から大分河川国道事務所と「道守大分会議」が協働で、他県にはない「マイツリー活動」を行っています。これは国道10号に樹木を植え、抽選で選ばれたそれぞれの木のお世話をさせていただく（個人・家族・グループ）が草取りなどの

手入れをしながら木の成長を見守っていく制度です。約1.3キロの区間にホルトノキ（大分市の市木）とシマトネリコが100本植えられました。マイツリーには、いろいろな想いがこめられたプレートが付けられています。木の成長と重ねるように孫の名前を付けている方や、亡くなった子どもの名前を付けている方もおられます。

**国**道10号は、九州の東海岸沿いに北九州市から、大分県、宮崎県を通り、鹿児島市へ至る道です。マイツリーは、別府市と大分市間の風光明媚な別府湾沿い（通称別大<sup>べつだい</sup>国道）に植えられています。マイツリーの区間内には、お猿の高崎山と大分マリンパレス水族館「うみたまご」の観光スポットもあります。

ご家族お揃いで故きを温め新しきを知る大分へお越しください。



平成16年第1期植樹式の様子。

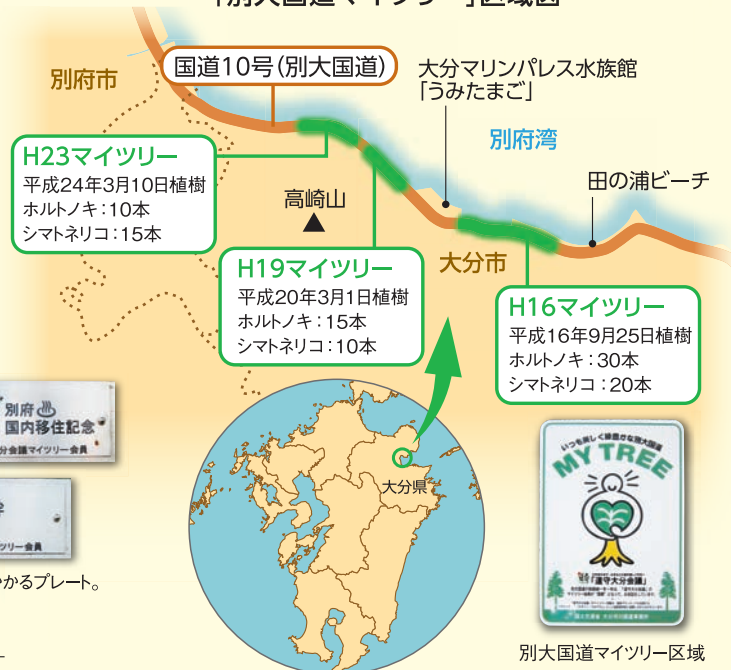


道守活動の基本はボランティア。



マイツリーにかかるプレート。

### 「別大国道マイツリー」区域図



道守大分会議 <http://michimori.org/>